

氏 名	山本 哲子
学 位 の 種 類	博士（ヒューマン・ケア科学）
学 位 記 番 号	博甲第 9123 号
学位授与年月	平成 31年 3月 25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審 査 研 究 科	人間総合科学研究科
学位論文題目	医療福祉現場で働く外国人の職業性ストレスについての検討
主 査	筑波大学教授 医学博士 水上 勝義
副 査	筑波大学准教授 医学博士 柳 久子
副 査	筑波大学助教 博士（ヒューマン・ケア科学） 岡本 紀子
副 査	筑波大学講師 博士（医学） 高屋敷明由美

論文の内容の要旨

山本哲子氏の博士学位論文は、経済連携協定（Economic Partnership Agreement 以下 EPA）で来日した看護師ならびに介護士の職業性ストレスについて包括的かつ詳細に検討したものである。その要旨は以下のとおりである。

（目的）

著者はまず先行研究を概観し、EPA 看護師・介護福祉士のストレスについて、言葉やコミュニケーションの壁や、異なる文化・生活習慣等が報告されていること、仕事に関連するストレス要因として、母国との看護スタイルの違いや、日本の免許取得まで看護助手として勤務することへの葛藤、看護師としてのアイデンティティの揺らぎなどが報告されていることを述べている。しかしながら、EPA 看護師・介護福祉士の職業性ストレスについて、緩衝要因、個人要因を含め包括的に検討した報告がみられないことを問題点として指摘している。

これらの先行研究をふまえ、著者は、EPA 看護師・介護福祉士のストレス反応と関連する要因を詳細に検討し、EPA 看護師・介護福祉士のストレス反応を軽減する一助となるような示唆を得ることを目的として以下の5つの研究を行っている。

（対象と方法）

研究1から研究4では、厚生労働省が公開している国家試験合格者一覧に掲載されている施設に著者が調査協力を求め、協力が得られた施設に勤務する EPA で来日中の看護師・介護福祉士を研究対象としている。職業性ストレス簡易調査票を用いた調査を行うと同時に、首尾一貫感覚（ストレス対処力）などの個人要因についても調査し、ストレス反応と関連する要因について検討している。研究5では、免許・資格取得後に帰国した4名の EPA 看護師と3名の EPA 介護福祉士に、著者が帰国先でインタビューし、帰国理由や就労時のストレスについて調査している。

（結果と考察）

研究1では、EPA 看護師 72名の回答から、「母国との仕事の違いの戸惑い」を7割以上の EPA

看護師が感じていること、「仕事の負担（質）」「身体的負担」のストレスが高いこと、男性看護師は「技能の活用度」、女性看護師は「仕事の適性度」のストレスが高いこと、「有意味感」が日本人女性看護師よりも有意に低いこと、女性看護師の「心理的ストレス反応」には、「仕事や生活の満足度」が関連することなどを明らかにしている。

研究 2 では、106 名の EPA 介護福祉士の回答から、EPA 介護福祉士は、6 割以上の者が看護師との意見の相違に戸惑いを感じていること、「仕事の負担（質）」「身体的負担度」「技能の活用度」のストレスが高いこと、「心理的ストレス反応」に、EPA 女性介護福祉士は「仕事の負担（質）」と「コントロール度」が関連し、EPA 男性介護福祉士は「把握可能感」が関連することを明らかにしている。EPA 女性看護師同様、「有意味感」が日本人女性よりも有意に低いことに言及し、EPA 女性看護師や介護福祉士は、日本での仕事を有意なものと感じにくい可能性を指摘している。

研究 3 では、EPA 看護師・介護福祉士の職業性ストレスについて比較検討を行い、「仕事の適性度」のストレスは EPA 女性看護師が高く、EPA 男性看護師や EPA 介護福祉士は「技能の活用度」のストレスが高いこと、EPA 看護師・介護福祉士共に「上司からのサポート」は、男性が女性に比較して低く、性差を認めたことなどを報告している。

研究 4 では、日本の国家資格取得の有無による EPA 看護師・介護福祉士の職業性ストレスの違いについて検討している。その結果、EPA 看護師も介護福祉士も、未取得者は日本の生活の慣れ、日本語の理解、SOC との関連が取得者より大きいこと、看護師は免許取得者の方が「仕事の負担（質）」が有意に高く、「対人関係」が「心理的ストレス反応」と関連するようになることを明らかにしている。また EPA 介護福祉士は、未取得者の方が「コントロール度」「活気」「上司からのサポート」「仕事や生活の満足度」が有意に低いことを明らかにしている。著者はこれらの結果から、EPA 看護師や介護福祉士のストレス対策には資格の有無についても考慮する必要があることを指摘している。

研究 5 では、免許・資格取得後に帰国した理由として、母国の家族に関連する理由が最も多く、その中でも家族の病気が一番多いことを明らかにしている。さらに、有休の取得が難しいこと、多職種連携が難しいこと、仕事と子育ての両立が難しいこと、人手不足によるケアの質の低さや身体的負担の大きさなど日本人にも共通してみられるストレスを感じていることを明らかにしている。
(結論)

以上の一連の研究から、著者は、EPA 看護師と EPA 介護福祉士の職業性ストレスの特徴とその関連要因を明らかにした。日本語の難しさや母国の仕事内容との違いをはじめとする外国人就労者特有の要因のほかにも、日本人が感じていると同様の仕事に関するストレス要因を認めることを明らかにし、労働環境や職場環境などの改善が必要であると結論した。

審査の結果の要旨

(批評)

本論文は、日本で働く EPA 看護師と介護福祉士の職業性ストレスの特徴や関連要因についての最初の詳細な論文である。外国人労働者特有の職業性ストレスとともに、日本人労働者も抱えているストレスを同様に自覚していることや、資格取得の有無によりストレス内容が変化することをストレス対策に考慮する必要があるなどの重要な指摘知見を報告している。本論文は、今後も増加が予想される外国人看護師や介護福祉士のストレス対策に活用される社会的意義が大きい論文である。

平成 31 年 1 月 17 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（ヒューマン・ケア科学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。